

# 郷土摂津 いにしえ通信

## 第55号 平成14年11月1日

発行 摂津市教育委員会 生涯学習課生涯学習課

〒566-8555 摂津市三島一丁目1-1

TEL (06) 6383-1111 TEL (0726) 38-0007

ホームページアドレス <http://www.city.selfon.asaka.jp/>



第8回  
くらはんか舟



柱本茶船の始源は、柱本茶船文書によると、石清水八幡宮遷宮の時の奉仕、豊臣秀吉の明智光秀退治帰陣の時の奉仕、大仏建立の用材川登の際の奉仕等の事柄があげられています。これらの事項は、往古の働きの由緒を示すものとしてとりあげられているのであって、淀川水上商売の独占権を確立した事実上の始源は、徳川家が天下統一をとげる課程における最終段階であった大坂の陣における茶船の功績が、天下統一後、徳川家康のかちとった絶対的権威を背景としての特権として認められたときと考えられます。

元和元年（1615）五月大坂夏の陣の時、河内国岡山（四条畷市岡山）に家康は本陣をおきました。その時柱本茶船に対して、代官北見五郎左衛門は、同年九月十六日高槻城の蔵より兵糧米二万石を運送することを命じ、柱本茶船はこれに従事し、又、戦陣の間の飛脚を舟で渡したりしています。このため、二十艘の舟でこれに当りました。

さらに、同年九月二十一日に摂津国吹田村河表で、代官北見五郎左衛門の指示によって、田部小兵衛・中村太兵衛兩名の小奉行が付添い、徳川方女中共の安全地帯へ避難のため、柱本茶船五艘が舟渡をしています。

これらのことが代官北見五郎左衛門より家康へ上聞に達し、「怪しき身分にては莫大の働」と喜ばれ、これらに対するほうびとして淀川の乗合の旅人に対する茶船の商売を柱本茶船に限定されました。

### 石清水八幡宮の遷宮と茶船

清和天皇の貞観二年（859）、八幡社が、山崎から男山に遷宮する際、淀川を往来する船で橋をつくりました。2日間、48艘の船をつなぎ、上に板を掛け参詣の人々が往来しました。この参詣人を相手に商売したのが茶船の始源とみられます。





講座や展示のご案内、活動報告など多彩な文化財情報を毎月お知らせします。また、このページでは皆様の投稿を募集しています。

## 電子出版物のお知らせ

# パソコンで見る摂津市の歴史

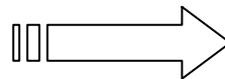
### 【ダウンロードの方法】

摂津市ホームページを開きます。  
 ( <http://www.city.settsu.osaka.jp/> )  
 担当各課のページをクリック  
 生涯学習課の項をクリック  
 それぞれの刊行物の項をクリック



電子出版物とは、印刷物をパソコン上で読めるようにしたもので、文字情報のほか図表や写真がレイアウトを崩すことなくそのまま再現されるものです。今回お知らせします刊行物はPDF（ポータブル・ドキュメント・フォーマット）と呼ばれる形式で、文書を見るためのソフト「Acrobat Reader・アクトバトリーダー」を用いて、パソコンにより誰でも見る事ができます。

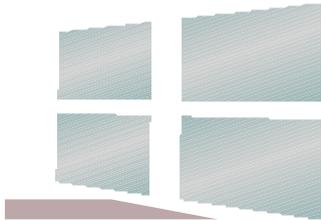
## 摂津市域の歴史と昔の暮らし



古代からちょっと昔まで摂津市の歴史や昔の生活を、多数の写真や図を用いて説明しています。縄文文化の時代「大阪平野は海、千里丘は海岸線」など各項目ごとにダウンロード（データの転送）ができます。全てのページをダウンロードしますと3.36MBの容量になります。



毎月、摂津市の文化財情報をお知らせしています本通信もインターネットで見ることができます。バックナンバーも随時追加していきます。



## 郷土史コーナー

### 三宅 (みやけ) の歴史

意外と身近な郷土の歴史を紹介していきます。

### 応仁の乱と三宅氏

#### 幕府の乱れと応仁の乱 (3)

細川両家の争いを通じて、撰津国では三宅氏をはじめ茨木氏・安威氏・太田氏・池田氏・伊丹氏等々の国人層の活躍が目立ってきました。実際の戦闘は、ほとんど彼らに負っていたようです。もともと彼らの多くは、その何代か前から名田経営をすすめ、しだいに在地の小領主化する方向をたどり、戦国乱世に乗じて武士化して地侍となり、在地の農民たちを味方につけ、足軽(雑兵)を養って実力をたくわえ、国侍・国人などと呼ばれる存在として発展することになりました。そのためには、三宅氏が三宅城、茨木氏が茨木城を構えたように、彼らの地元に城を構えることが必要でした。もちろん、この時代は城といっても後世のような大規模で複雑な構造のものではありません。

さらに、彼らが国侍・国人として発展するためには、上級の権力、撰津守護細川氏などの政治権力を背景とすることが必要であり、細川氏もまた彼らを家臣化して支配権力の強化をはからねばなりません。したがって、その細川氏に内紛がおこると、国人たちもそれぞれ、いずれかに属して、戦いあいました。しかも、これら国人勢力にも複雑なものがあり、一族間でももとより分裂・敵対勢力がみられたし、みずからの存続をはかるためには、その時々敵味方立場をかえねばならないことも少なくなかったようです。三宅氏はじめ撰津の国人たちがたびたび所属をかえて記録にあらわれてきますが、それもいわゆる寝返りの場合もあれば、一族の分裂の場合もあって、まことに複雑な様相を呈していました。

ところで、注目すべきことは、撰津の国人たちが決して武だけの人ではなかったことです。池田の池田氏、能勢・芥川の能勢氏、山下(川西市)の塩川氏、伊丹の伊丹氏、越水(西宮市)・芦屋の瓦林氏などは、連歌師宗祇・宗長・肖柏らから親しく教えをうけ、連歌に深いたしなみをもっていました。以上にあげた諸氏は、いずれも西国街道で容易に結ばれる諸氏であることも注目されます。彼らはともに連歌の一座に列して、親交を深めたことも多かったようです。さらに撰津国人たちの中には、しばしば京におもむいて、当代きっての文化人、内大臣三条西実隆など、文化人とまじわる者が多くいました。したがって、連歌だけでなく、撰津国人たちはかなりの教養をつんだものたちであったと思われる。

なお、並河誠所らの『撰津志』には、「蜂前寺、味舌上邑にあり、号して金剛院という。不動の絵像あり、書して曰く、永正元年八月、飛弾守三宅国英修補す」とあり、また、「蓮華寺、西沢良宜村にあり。涅槃像あり、書して曰く、天文五年四月、出羽守三宅国村・遠江守永清修補す」とも記しています。国村・永清は、国英を父とする兄弟であったという地元の伝承があります。三宅一族が金剛院や茨木市沢良宜西の蓮花寺の画像を修補したことが知られています。両画像とも現在は所在不明です。次号につづく。

『撰津市史』より

担当 (茗荷)

## 第20回

埋もれた  
摂津市の歴史

発掘調査で明らかになっていく摂津市の埋もれた歴史をシリーズで紹介していきます。

平成9年度

東正雀13-1 試掘調査

その3

**出土した土師器について** このときの調査では、比較的まとまって土師器（甕・小型丸底壺・高坏）が出土しました。上部が削られた浅い土坑からの出土で完形ではありませんでしたが、比較的良好的な残存状況でした。これらの土器は、当時のゴミとしてではなく、ある意志をもって設置されたような状況でした。

いずれも土師器という古墳時代から奈良・平安時代にかけて使用された素焼きのものです。中世以降も同系統の土器が残りますが、それらは「土師質土器」、「かわらけ」などと呼んで区別する場合があります。土師器の出現は、古墳時代からとしますが、酸化焰焼成による赤褐色の色調、成形に轆轤（ろくろ）を使用しない粘土紐の積み上げ手法など、前代の弥生土器との共通性が見られます。このため弥生時代の弥生土器から古墳時代の土師器にいたる間の土器について様々な議論が行われています。いわゆる庄内式土器（豊中市所在する庄内遺跡出土遺物を指標）といわれるものです。

この弥生時代と古墳時代の過渡期ともいうべき時期に使われた庄内式土器の後に、布留式土器（天理市布留遺跡出土遺物を指標）が位置します。この2つの型式の土器は時代の大きな変革期のなかで様々な角度から研究されています。

大阪府下では、高槻市安満遺跡出土資料の森田克行氏による研究。八尾南遺跡出土資料の米田敏幸氏による研究などが知られています。これら成果から中河内編年と呼ばれる土器のつくられた時代や形の変遷が示されています。

また大和においては、寺沢薫氏が矢部遺跡から出土した土師器を分析し矢部編年を発表し大きな話題となります。現在、畿内ではこの2つの編年案が並立しており両者の相関関係について議論が交わされているところです。次号につづく。 担当（伊部）



東正雀13-1 試掘調査出土小型丸底壺  
上部の口縁部は欠けています。胴部最大径は9.6 cmです。外面は比較的丁寧仕上げていますが、内面は粗製で凹凸面を残します。布留式期でも後半の時期（中河内編年 期）と想定されます。